

しっぽも一役



本校の応接室に入ると右手奥の壁に、百キロもありそうな豚のひと筆書きに、「しっぽも一役」としたためた古い額がある。これは、故永井隆博士の親書である。昭和25年、全校児童の映画教室が行われた。それは、永井隆博士が、原爆患者の診断と治療中、原爆罹患となり、病床にあってつづった「この子を残して」という原作を映画化し「長崎の鐘」と題した記録映画であった。

わが子を残して間もなく他界する父親の切ないわが子への愛情と病床の父を見舞う二児の涙ぐましい光景に、本校の児童はすっかり感激したのである。四年三組（担任草野教諭）の児童たちは博士の偉大な人格に胸打たれ、学級自治会を開いて、いつ死ぬかわからない永井博士に慰問文を書くことにした。

六十人の子どもたちは全員筆を揃えて見舞いの手紙を書き、中には郷土の絵葉書を買ってくるものもあり、封筒にしおりを入れるものもあり、一同は各々真心を込めてこれを投函したのである。

病床でこの手紙をご覧になった博士は、さっそく本校に宛てて味のある筆で、上の写真のような豚の絵とその讃を書いて送ってくださったのである。当時の吉田校長は、全校朝の会で児童たちに、おおよそ次のような講話をした。

「大きな豚の体についているしっぽは、誰にも気がつかれない。しかし、その小さなしっぽも豚にとっては大切な一役を果たしていなくてはならないものである。私たち人間も一人一人は、豚のしっぽのように目立たない存在であろう。しかし家庭や学校、社会を構成する大切な一人一人である。人間は一人でも尊ばれなければならない。また一人一人は豚のしっぽのように、一役を果たさなければならない。一人一人が一役を果たすことによって、学校も、社会も良くなる。私たちはみんな大切な存在であり、社会に役立つ人間にならなければならない。」
(鶴城小学校百年史より)

